

異常気象を意識したコンパクトで丈夫な稲づくり 良質苗の適正な田植えと水管理で初期生育確保！

ここがポイント！

- 1 夏期の高温対策として作期幅の拡大に努める
- 2 活着までは水深3～4cmを保ち、活着後は2～3cmのやや浅水管理とする
- 3 除草剤は適期を逃さず散布し、散布後は湛水状態を保つ
- 4 5月下旬以降、活着後「夜干し」実施等によるワキ対策を徹底する

1 田植え作業

(1) 田植え日

ア 常態化する夏期の高温対策として、コシヒカリの田植えは5月10日以降を基本とする。また、収穫時期の作業分散を考慮し、段播きや直播栽培の導入等作期幅の拡大に努める。

イ 田植え時期から逆算し、適期播種により規格苗を育成する（稲作技術情報 No. 1 参照）。

ウ 発根・活着を良好にするため、田植えは好天日に行う。特にプール育苗は低温に弱いので注意する。

(2) 栽植密度、植え付け本数

ア 本数を適正に制御し、品質低下を防ぐため、コシヒカリの栽植密度は平坦地で50株/坪、山間地で50～60株/坪を基準とする。

イ その他の品種の栽植密度は50～60株/坪を基準とし、品種の特性、移植時期や土壌の肥沃度により調節する。こしいぶきは60～70株/坪とし、肥料の過剰施用を避け、適正な生育量にする。

ウ 過繁茂、細莖化による倒伏や品質低下を避けるため、植え込み本数は1株当たり3～4本とする。つきあかり等莖数が増加しづらい品種は4～5本とする。

エ 下位分げつの発生を促進するため、植え付け深さは2～3cmとする。

2 田植えから中干しまでの水管理

(1) 田植え後から活着するまで（田植え後7～10日間位）は水深3～4cmの保温的管理とする。低温や強風の場合は、植え傷みを避けるため4～5cm程度のやや深水とする。

- (2) 下位分けつの発生を促すため、活着後は2～3cmのやや浅水とする。
- (3) 水を更新する場合は、早朝にかん水し日中は止水として水温の上昇を図る。
- (4) 活着後、ワキや藻・表層剥離が大量発生する前に、早めに水の入れ替えや夜間落水をする。

3 除草剤の効果を最大限に発揮

- (1) 丁寧な畦塗りや代かきで漏水を防止し、田面を均平にする。
- (2) 初期剤は、河川などへの流出を防止するため、田植え時または田植え後に散布する。
- (3) 雑草の葉齢をよく確認し、散布適期の範囲で早めの散布を心がける。
- (4) 散布後は、剤に合わせた水深を確保する(粒剤は3～5cm、フロアブル剤は5cm程度、ジャンボ剤・豆つぶ剤は5～6cm程度)。処理後7日間は止水とし、4～5日間は湛水状態を保つ。
- (5) 農薬使用は製品ラベルに記載されている使用基準や注意事項、使用方法をよく読み、内容を遵守する。

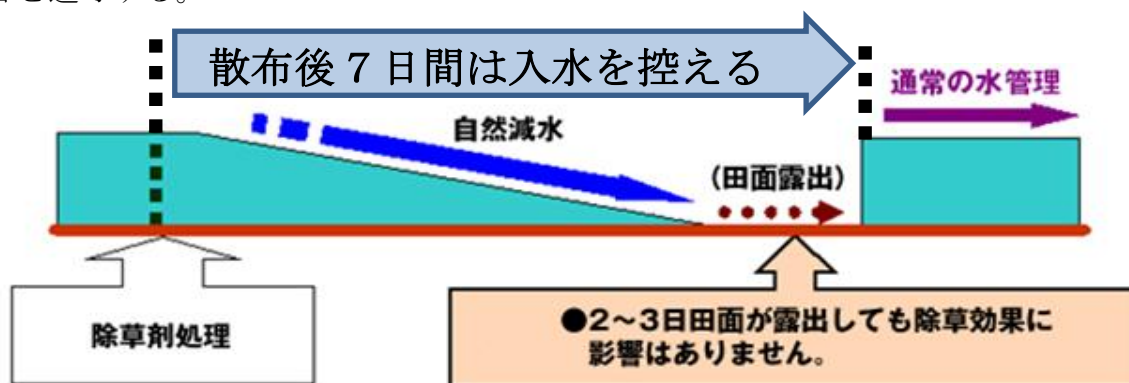


図1 除草剤散布の水管理のイメージ

4 新之助栽培のポイント

- (1) 出穂25日後までの用水確保や土壌の肥沃度等を考慮し、作付ほ場を選定する。
- (2) 田植えは稚苗植えで5月中旬頃をめやすとし、経営規模や標高、水利条件等を考慮した上で適切に設定する。
- (3) 適正な生育量に制御するため、栽植密度は50株/坪を基準とする。
- (4) 葉いもち防除(箱施用または水面施用)は、必ず実施する。



春の農作業安全運動実施中(5月31日まで)

毎年、農業機械作業による死亡事故が発生しています。安全のためシートベルトやヘルメットの着用を徹底し、適度な休息をとりながら安全な農作業を心がけましょう。また、農作業後トラクターなどの農業機械が道路に落とす泥や土は、自転車や歩行者の通行の妨げや交通事故の原因となり大変危険です。道路上に泥や土を落とした場合は、速やかな撤去をお願いします。交通安全と環境美化のため、ご協力下さい。